

平成22年度 泉苑事業報告書要約

平成22年度の概況	<p>1 組織・運営 組織的な運営に対する意識は向上した。会議の効率的・効果的な運営にも努めた。家族支援システムは、負担軽減には至らなかったが、その目的を意識し取り組んだ。センターの稼働が低迷、ホームも後半は入院・永眠が続き、減収となった。前年後半に取得したホームの夜勤体制加算と居宅の特定加算収入が多少それをカバーする形となった。</p>
	<p>2 職員確保・育成 目的を意識して基礎研修等に取り組んだが、職員のスキルや価値観の格差は拡大傾向となった。施設内研修は、各研究会、専門職員チームで基礎研修を企画実施し、実技も取り入れより実践的な研修となって職員の満足度も高く、講師を務めることによる自己研鑽効果も得ることが出来た。</p>
	<p>3 サービス向上 取り組み意識は高く、排泄研の個別ケアの取り組みから生み出した時間を余暇活動や生活環境整備に充当し、生活の質の向上に取り組んだ。入浴・食事研も重度化したご利用者の個別状況を配慮したサービス内容を点検し、ケアプランの確実な実践につなげた。通所は、認知症利用者の増加など、マンツーマン対応も増え、プログラムの工夫と安全に努めた。家族懇談会を年2回とし要望を伺うと共に活動への理解を深めたが、参加者の拡大が課題である。情報公表・第三者評価(特養・短期)受審、職員の業務態度や意欲に高い評価を受けた。また、サービス自己評価とあわせ、業務を再確認し次年度の課題を整理した。介護相談員、オンブズパーソン等客観的な意見を聴取し改善点は速やかに対応するよう努めた。</p>
	<p>4 リスク管理 職員の徹底した衛生指導や意識向上で感染症は防止できた。一方大事故にはならなかったが心身の重度化に伴い転倒、徘徊、誤燕等生活リスクは多く発生、根本的な解消には至らなかった。</p>
	<p>5 建物管理 大規模改修・耐震化工事は予定より4カ月遅れての協議書提出となった。工事に備え、すべての倉庫整理を行い、経年の物品、資料を整理し、再活用や廃棄処分とした。3月11日に発生した地震により建物の各所にずれや亀裂を生じたが、大事には至らなかった。</p>

平成22年度の課題	<p>1 事業ごとの責任体制、業務の明確化によって、総合力を高め、地域の高齢者サービス拠点の役割を果たす。家族支援システムの稼働推進と記録の充実、負担軽減。</p>
	<p>2 働きやすい労働環境、職員関係の構築。OJTによる職員相互育成、法人推進事業との連携で実施する施設内研修の充実、職員のスキルアップ。</p>
	<p>3 法人理念・指針を意識し、利用者の意向や希望を尊重した個別ケア、残存能力尊重の自立支援、安全・安心の生活環境提供、緊急事態への適切な対応とターミナルの取り組み。</p>
	<p>4 感染症に関して従来の蓄積してきた防止策・対応策の一層の徹底、特に新人職員への啓蒙啓発に取り組む。 職員の不注意による配薬等の防止と共に、転倒等の生活リスクはご家族と充分話し合い、どのような生活を望まれるかによって方針を明確化する。</p>
	<p>5 居ながら工事が予定される大規模改修・耐震化工事が事故なく、安全に行われるよう準備する。完了後の保守・メンテナンス体制を整備する。</p>
	<p>6 地域包括支援センターの基本業務の確実な遂行。地域のネットワークの要としての役割を果たす。</p>
	<p>7 防災・防犯対策を強化。訓練を通いざという時の動きを身につける。</p>

		サービス利用・提供状況	平成22年度事業計画の執行評価
運営・管理	事務局担当	<p>1 事務局集約作業が促進され、施設の経理・請求等事務作業が軽減された。 2 大部分の未収金の回収がすすみ、回収不能と判断した分について、欠損処理を行った。 3 次年度以降の施設整備を見据え、施設整備積立金を182,000千円積み立てた。 4 施設担当内での業務については、省力化を図るまでには至らず今後の課題となった。</p>	<p>1 適切に実行された。 2 およその未収金管理ができた。 3 概ね予算通りの執行となった。 4 各職員のスキルアップが必要。</p>
	サービス向上	<p>1 23年度の大規模改修、耐震化工事に向けて検討を重ねた。日常修理も継続実施した。 2 東京都の実施指導を受け、業者選定を経理規程に基づく競争入札を実施した。 3 オンブズパーソンについては実施日を決めて実施するよう努めた。 4 資格取得は職員への意識啓蒙が不十分であったため、課題を残した。 5 「介護サービス情報公表制度」「福祉サービス第三者評価」を受審、利用者家族に報告した。</p>	<p>1 協議書提出が済み内示待ち。 2 入札により公正な選定を実施。 3 結果を周知し改善につなげた。 4 介護福祉士の取得はすすんだ。 5 職員の前向きな働きぶりが評価。</p>
支援センター	包括	<p>1 相談件数は4,522(新規相談228件)。虐待・権利擁護、包括・継続的支援を要する専門相談が増加。 2 包括支援センターの周知を兼ね地域との関係性強化や認知症への正しい理解の普及啓発に努めた。 3 孤立化しやすい都営団地の独居・高齢世帯を主に個別訪問し、実態把握と周知活動を実施した。 4 第五地区の各町にて介護予防講座を展開。講座53開催、参加延べ人数637名。 5 介護予防支援業務を受諾、予防プラン(約100件/月)と委託予防プラン(約50件/月)管理に努めた。</p>	<p>1 家族関係希薄化等により出勤数は増。 2 認知症家族懇談会の定着が図れた。 3 元気な方には見守りネット協力依頼。 4 新たに教室開催可能な会場を開拓。 5 業務が軌道に乗るまでに時間を要した。</p>
	居支	<p>1 生活全般の情報の把握に取り組み、サービス開始時に必要と思われる情報を提供した。相談しやすい関係づくりを意識し、本人、家族や関係機関との良好な関係作りをした。 2 有資格者の専門職であるとの意識の欠如で、業務の期限管理が不十分であった。法令遵守の判断基準(到達点が見えない)が不明で、常に不安感や劣等感の中でのケアマネジメント業務となった。 3 職員間のフォロー体制が不足し、チーム力向上への努力が不足していた。 他部署との情報交換、ケア方針の徹底のための、機会確保が不足していた。</p>	<p>1 本人、家族や関係機関との良好な関係を確保した。情報の提供および、ニーズの把握に取り組んだ。 2 法令遵守に基づいた書類管理等、管理業務の強化が必要。 3 他部署、連携部署とのケア方針徹底欠如。</p>
センター	通所(デイ)	<p>1 重度化が進行し、介護度と要するケアの落差が拡大した。登録者数は207人(+19人)であったが、入院やショート利用等で欠席数が多く、実績数の増加へはつながらなかった。また、認知症対応型の活動内容は次年度の検討課題となった。 2 入浴は身体状況を配慮した形態とした。浴室環境は利用者にも必ずしも快適な状況ではなく、機器のメンテや装飾、菖蒲湯等、快適さや季節を感じられる様努めた。通所の実績減もあり、入浴者数も減となった。送迎も同様な状況だが、職員間の連携により効率的な動きに努めた。</p>	<p>1 新規利用者に迅速に対応したが、ニーズ多様化の中、アピールは不足。 2 様々な対応に努めた昨年同様、送迎コースや入浴形態の多様性、需要に体制整備が遅れ待機者の解消には至らず。</p>
	通所外	<p>1 推進事業は延べ参加人数が283名の増であった。地域デイサービスは実人数で4名の増加、参加利用者の増加が今後の課題である。 2 KCとの連携もとれた。今後の課題として包括全体との情報共有が必要である。</p>	<p>1および2 KCおよび支援センターとの連携も強化され、スムーズなサービスにつながった。</p>
ホーム	ホーム	<p>1 入所が28名、退所が27名。(泉苑での看取り15名、長期入院5名、病院での永眠7名) 今年度は長期入院での退所が目立ち、また通院、入院が多くあった。 2 各研究会では年間の目標を立て目的意識をもち取り組んだ。 3 重度化に伴いひやりハット、事故件数が増加。職員のミスによるものも目立った。 4 余暇活動は参加メンバーを考慮、また研究会の取り組みで生まれた時間を有効活用し実施した。 5 福祉機器導入について、研修を実施。スライディングシートの活用につなげた。 6 効率的な業務、情報共有に注力したが、課題は残った。</p>	<p>1 年間の稼働率94.4% 2 個別ケアを意識したケアプラン作成、 3 日々の確認、職員の指導に注力したが、継続した取り組みが必要。 4 計画どおり実施できた。 5 定着に向けた取り組みへ一歩前進した。 6 次年度の事業計画に具体的に示した。</p>
	ショートステイ	<p>1 入退所数の調整、空きベッドの情報を関係先に発信し稼働率の向上に努めた。 2 利用者家族の高齢に伴う介護負担の増加(長期利用や緊急対応など)極力対応したが、今後も継続して検討していく必要のある課題となっている。 3 地域包括・居宅等からの緊急ケースについては、他事業の協力も得て受入れに努めた。</p>	<p>1 入退所数の調整(安定した稼働)。 2 緊急ケース・困難ケースのスムーズな受入れ。 3 支援事業所との連携強化。</p>
連携	看護	<p>1 健康管理は年間計画に基づき実施し、結果を家族に報告した。本人にも必要時説明した。 2 重度化に伴い、急性増悪ケースが増。通院＝入院のケースが29件 心肺停止状態などで、救急車依頼が5件 検視も1件。提携病院と連携し、入退院は比較的スムーズにおこなえた。 【通院件数298件<歯科117件・緊急5件>・看取り15件】重度化が進む中、通院の半数近くを歯科受診が占めており、今後検討を要する。 3 警察病院の閉院に伴い、早期から新規の病院の開拓を心がけた。 4 感染症予防対策はアルコール系と次亜塩素酸系の消毒液の併用、空気清浄効果を利用し感染防止に努めた。護良研修を実施。内容も定着しつつあり職員の意識も向上してきた</p>	<p>1 異常の早期発見に努めた。また、日々の観察や介護との連携にも努めた。 2 提携病院等と連絡を密にし、連携できた。 3 新規の病院の開拓に努めた。 4 掲示・メール等でも啓蒙を図った。</p>
	訓練	<p>1 新規の個別機能訓練実施計画書の作成・訓練メニューの提供はおおむね計画通り実施出来た。 2 部署間の情報共有や連携への意識は高まったが、部署内の情報共有が不十分なことがあった。 3 事務系の業務に偏りが生じ、モニタリングや評価、訓練計画書の更新等が滞る事態が生じた。</p>	<p>1 計画に則った業務遂行に努めた。 2 部署内の情報共有の見直しが必要。 3 適正な業務体制の見直しが必要。</p>
	食事	<p>1 食事提供数:ホーム113,846食(形態別年平均/粥食55.4%・キザミ食32.0%・ペースト食23.0%) ショート16,474食・通所11,187食・地域デイ1,180食・訪問食事3,980食/計152,961食 2 美味しく・安全な食事作りを基本とした。嚥下困難者の食事は、素材の味を大切に見た目から伝わるよう、盛り付けの工夫をし、ソフト食の研究し、恒例の食の集いや行事食にて提供した。 3 前年度厨房の改修工事を終え、真空調理方法の基本的な技術・食材管理・衛生管理を習得し、新メンバーの育成に取り組み、計画生産を定着させた。質の安定が次年度の課題。 4 職員育成はそれぞれの立場を理解した上で、意識的に取り組んだ。(チャレンジプランの活用)</p>	<p>1 嚥下・咀嚼の傾向比較は一概にできず。 2 咀嚼や嚥下の状態に合わせた、食事形態や濃度調整が必要。ソフト食作成の育成を行ない、質の安定に繋がった。(ミキサー粥濃度の変更H22.8.1から) レンビの確定が次年度継続となる。 3 レンビの確定が次年度継続となる。 4 自分自身を振り返る時間を設けた。</p>